

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：32406

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23080

研究課題名（和文）戦後台湾文学における「戦争記憶」に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Memories and Heritage: Memories of Wartime in Postwar Taiwanese Literature

研究代表者

明田川 聡士（AKETAGAWA, SATOSHI）

獨協大学・国際教養学部・専任講師

研究者番号：30844203

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、戦後台湾文学における代表的作家の「戦争記憶」をめぐる問題を世代でわけて解きあかし、さらにその成果の一端として学術書『戦後台湾の文学と歴史・社会——客家人作家・李喬の挑戦と二十一世紀台湾文学』（単著・関西学院大学出版会、2022年）を発表することにより、戦後台湾文学における「戦争記憶」に関する基礎的研究を進めた。その中でも特に指摘できるのは、とりわけ戦争経験のない新しい世代が描き出す物語は、戦争の代償を厳しく指弾するものではなく、世代や省籍、あるいは族群といった現代台湾社会に残る垣根を越えながら東アジアの融和を見据えて「戦争記憶」を継承するものであったことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、日本と台湾では経済・文化面での交流が深まり、相互の理解も進んできた。ただし、アジア・太平洋戦争の記憶をめぐる解釈のちがいは、双方で誤解を生む原因にもなることが予想される。そこで本研究では、台湾で生きる人々の感情や意識をくみとることを目指して、台湾人作家の「戦争記憶」をめぐる作品を作家の世代でわけて読み解き、戦後に「戦争記憶」をめぐる台湾文学作品が多元的にあらわれた意義を解明した。「戦争記憶」を扱う台湾文学が、戦後の国民党による政治的禁制が続いた戒厳令期の時代、さらにはその後の民主化以降の新たな時代に、それぞれいかなる意味を持ったのかを、人と社会、歴史、文学の関係から考察したのである。

研究成果の概要（英文）：This study investigates “Memory of War” as described in writers and works in postwar Taiwanese literature. My first academic book, Literature, History and Society in Postwar Taiwan: A Look into Hakka Writer Lee Chiao and Taiwanese Literature in the 21st Century (Hyogo: Kwansai Gakuin University Press, 2022) is the initial result of the project “Memories and Heritage: Memories of Wartime in Postwar Taiwanese Literature”. Using works as a lens, this study considers memories with from comparison of generations. Narrative representations are examined to reveal the perspective of identity. New-generation writers who have no war experiences are no longer only limited to traumas caused by colonial victimhood, but also reveal cultural struggles, i.e. class, ethnic and provincial differences. With increasing vibrant globalization, it is argued that only through mutual understanding, can we go beyond the traditional framework of dual opposition between memories and history in East Asia.

研究分野：人文学 台湾文学 中国語圏文学

キーワード：台湾 台湾文学 戦争記憶 アジア・太平洋戦争 戦後 世代

1. 研究開始当初の背景

近年、日本と台湾は経済・文化面での交流がすすみ、一見すると、相互の理解も進んできたと思われがちである。しかし、台湾がたどってきた複雑な歴史と日本の関わりを理解するには、台湾で生きる人々の感情や意識をくみとることが欠かせないだろう。そうした中で無視できないのが、戦争に関わる記憶をめぐるものである。現に存在する意識の溝を放置すると、時代が過ぎるにつれて不可視かつ固定化されていき、双方で誤解を生む原因にもなることが予想される。

文学研究に関して言えば、アジア・太平洋戦争が終結した後（以下、戦後）の台湾文学を俯瞰すると、「戦争記憶」に関する表象的描写が非常に多いことに気づかされる。それは帝国日本の南進政策で尖兵的立場に位置づけられた本省人（戦前より台湾に居住する人たち）、抗日戦争と国共内戦の戦火をくぐり抜けた外省人（戦後に国民党とともに中国各省から台湾へ渡った人たち）が、それぞれ戦後の台湾文学界で中心的地位を占めたからである。アジア・太平洋戦争は世代の異なる多くの台湾作家がテーマとし、広く人々に読まれたものであり、七十年の時間軸で比較するのに適した題材とも言えるだろう。

そこで本研究の開始にあたっては、「戦争記憶」を扱う台湾文学が、戦後の国民党による政治的禁制が続いた戒厳令期の時代、さらにはその後の民主化以降の新たな時代に、それぞれいかなる意味を持ったのかを、人と社会、歴史、文学の関係から考察しようとするに至ったのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、台湾人作家の「戦争記憶」をめぐる作品を作家の世代でわけて読み解き、戦後に「戦争記憶」をめぐる台湾文学作品が多面的にあらわれた意義を解明することである。各世代を代表し、それに関わる創作数と読者数の多い作家に限定しつつ、さらに深く読み解くことで、台湾人の「戦争記憶」に対する意識とその変化の過程を理解することができるだろう。

本研究ではその研究目的を達成するために、台湾文学における「戦争記憶」の問題を1945年から現在までの時間幅に広げながら考察した。作家と読者を含む台湾人の「戦争記憶」に対する意識の変化を明らかにすることに、力を注いだのである。

3. 研究の方法

本研究では、「戦争記憶」を扱う台湾文学が、戦後の国民党による政治的禁制が続いた戒厳令期の時代、さらにはその後の民主化以降の新たな時代にそれぞれいかなる意味を持ったのかを、作家の世代でわけ、人と社会、歴史、文学の関係から考察した。戦後に「戦争記憶」が描かれたのは、植民地統治下を経験した台湾人作家による小説であった。台湾の文学界では1960年代に反共文学への反発として、アジア・太平洋戦争の実体験を持つ本省人作家による創作があらわれた。個人の記憶として従軍経験を持つ世代は、見聞をもとに自責の念にまみれた自身の内面を表現した。これに対して、それ以降の世代は別のアプローチで「戦争記憶」を描き出した。従軍経験を持たないが幼少期に民間人として戦争を経験した世代は、アイデンティティや階級意識、ポストコロニアリズムなど戦後台湾で社会的議論を呼ぶ問題を複層的に表出させるのが特徴的であった。さらに、こうした「戦争記憶」に関しては、2000年以降の台湾文学でも表出する課題であった。個人の記憶に頼ることのできない戦後生まれの世代では、アイデンティティや階級意識の問題を前景化させず、歴史の再解釈と問題意識のさらなる多元化に重点を置いていた。

こうした個々のケースに対する考察を重ねながら、本研究では「戦争記憶」の問題を扱う台湾文学が、戦後台湾社会でいかにして多面的に出現したのか、を明らかにした。また、それが台湾社会でいかなる社会的意味を持ち、台湾人読者に受容されたのか、も明らかにした。世代を代表する典型的な作家の作品について詳しく分析を試み、文学作品における「戦争記憶」が台湾人にもたらしてきた意味を検討したのである。そして、研究期間中には毎年度の口頭発表、論文発表に加えて、最終年度には、台湾人の「戦争記憶」への意識が変化する過程を考察する論文を含めた論考を、学術書（単著）として刊行した。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

本研究では、戦後台湾文学における代表的作家の「戦争記憶」をめぐる問題を解きあかし、その研究成果の一端として学術書を刊行した。その過程では、特に本省人作家による文学作品を中心に作家の世代でわけて、アジア・太平洋戦争をめぐる「戦争記憶」を調査し考察した。そこで明らかになったのは、戒厳令解除後の1990年代以降に出現した台湾文学作品はそれ以前とは異なり、より多面的な視角から創作を試みたということである。戦後台湾文学史の展開を追うと、その傾向は21世紀に入り、さらに顕著になっていることが見て取れる。

とりわけ、アジア・太平洋戦争を直接には経験していない21世紀に創作を始めた現代作家による作品では、戦争経験世代に対する理解と共感こそ覚えられるが、その差異は際立っている。そうした作家が目指すところは、世代のあいだでまたがる戦争経験の空白を埋めながらも、物語を通じて後代へと不戦の意志を伝えようとする表現であった。アジア・太平洋戦争を振り返る物語は、内省的な追憶でもって戦争を批判的に捉えていくものであったが、それはかつて直接的にあるいは間接的に戦争を経験してきた上の世代の台湾人作家が表現してきたもの——戦争の代償を厳しく指弾する物語——とは明らかに異なる筆致であった。物語中で強く示されていくのは、戦争の史実やその残酷さを仔細に描写し尽くすことではなかった。むしろ歴史的な事実に沿いながらも、自分自身を徹底的に戦争経験のない世代として客観視しながらその時代を追いかけることで、世代や省籍、あるいは族群といった現代台湾社会に残る垣根を越えながらアジア・太平洋戦争の記憶を継承していくものであったと言える。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

台湾社会は前世紀にはアジア・太平洋戦争に限らず、国共内戦、東西冷戦下で米国への軍事協力を行った朝鮮戦争やベトナム戦争など、世紀を通して戦争と不可分の関係にあり、台湾の民衆は緊迫した状況下での暮らしを強いられた。それゆえ、これまでの台湾文学界では、戦争が主題のひとつとして扱われてきたのである。先行研究でも、そうした諸々の戦争を題材や背景として描き出す文学作品が1960年代から1990年代前半に至るまでのあいだに多く生まれてきたことは指摘されてきた。物語中で表現される恐怖や諦観、驚愕、憤懣などの感情は、いずれも台湾人の「戦争記憶」の一部として継承されてきたのである。

ただし、実際には戦後の戒厳令期には、戦前より台湾に居住していた本省人作家が戦争に関わる自らの経験を創作という手段を通して語り出すことは極めて稀であったことも忘れてはならない。本研究の調査でも、本省人作家による戦争経験の語りが、戒厳令期に表に出てくることは少なかったことがわかった。加えて本研究では、作家の世代と世代を結ぶ連続性に着目し、アジア・太平洋戦争を直接には経験していない現代作家も、いかにして「戦争記憶」を創作で表現し継承していったのかを検討し、その一端を明らかにすることができた。そうした視点は先行研究にはない新しさである。

本研究の成果の一部は、台湾の学会誌でも査読論文として掲載された。また、日本や台湾で開催された東アジアの研究者が集う国際シンポジウムにも参加し、積極的に口頭発表を行った。研究成果の海外への発信は、今後もさらにより一層力を注いでいきたい。

(3) 今後の展望

本研究では、戦後台湾文学におけるアジア・太平洋戦争の「戦争記憶」の出現がいかなる社会的意味を持ち、台湾人読者に受容されたのかを調査してきた。また、そうした文学作品が戦後を生きる台湾人読者にもたらしてきた意味を考察してきた。研究の過程で得られた知見を学術書の刊行でもって発信したことにより、日本人のさらなる台湾理解という側面だけではなく、東アジアの人々と歴史への共感といった側面に対しても、ある程度は寄与することができたろう。

今回、自身の研究を進める中で、21世紀における台湾文学作品に関わる調査と分析が著しく不足している点に気がついたことも確かである。現代台湾文学でも「戦争記憶」を扱う物語は少なくないが、そこではアジア・太平洋戦争の記憶を傷跡としてではなく、和解のかたちで描き出す作風が非常に多い。しかもそうした作風は、アジア・太平洋戦争を題材とするものに限らず、東アジアと関わりのある過去の諸々の戦争をめぐる表現にも関係しているようだ。台湾をはじめ中国語圏社会では、いまなぜ作家による創作表現の中で戦争をめぐる「和解」を描く作風が強く好まれているのか。この点を考察し、その結果を公表することで、広く中国語圏に生きる人々が抱える感情に対しても日本人の共感と理解を促すことができるのではないか。この点については、今後の研究でさらに調査し、考察を深めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 明田川聡士	4. 巻 53(9)
2. 論文標題 台湾文学と台湾ニューシネマ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 121-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 明田川聡士	4. 巻 23(2)
2. 論文標題 二十一世紀中国語圏文学の一角 楊富閔	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 マテシス・ウニヴェルサリス	6. 最初と最後の頁 89-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 明田川聡士	4. 巻 20
2. 論文標題 林初梅, 黄英哲編『民主化に挑んだ台湾 台湾性・日本性・中国性の競合と共生』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 植民地文化研究	6. 最初と最後の頁 102-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 明田川聡士	4. 巻 3531
2. 論文標題 呉明益『雨の島』 台湾ネイチャーライティングの新しさ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 明田川聡士	4. 巻 22(2)
2. 論文標題 台湾文学における戦争記憶の継承 吳明益『眠りの航路』から『自転車泥棒』へ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 マテシス・ウニウェルサリス	6. 最初と最後の頁 1-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 明田川聡士	4. 巻 29
2. 論文標題 戦争記憶與想像 論李喬小説中太平洋戦争叙事與反戦書寫	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 臺北大學中文學報	6. 最初と最後の頁 273-314
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 明田川聡士	4. 巻 21(2)
2. 論文標題 歴史と文学のはざままで 戦後台湾人作家・李喬による太平洋戦争の記憶	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 マテシス・ウニウェルサリス	6. 最初と最後の頁 1-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 明田川聡士	4. 巻 -
2. 論文標題 遊走於歴史與文學之間 戦後臺灣人作家・李喬的太平洋戦争記憶	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 跨・界 第三屆戦後亞洲文學與文化傳播國際工作坊預稿集	6. 最初と最後の頁 75-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 明田川聡士	4. 巻 104
2. 論文標題 台湾・台南における文学作品の奥深さ 大東和重著『台南文学の地層を掘る：日本統治期台湾・台南の台湾人作家群像』（関西学院大学出版会，2019年）を読む	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 野草	6. 最初と最後の頁 83-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 明田川聡士	4. 巻 19
2. 論文標題 李喬『思想 想法 留言』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 植民地文化学会会報	6. 最初と最後の頁 16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 明田川聡士
2. 発表標題 臺灣文學，記憶與影像中的少年工意象初探
3. 学会等名 第五屆竹塹學國際學術研討會（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 明田川聡士
2. 発表標題 戦後台湾人の文芸創作における「台湾少年工」表象をめぐる一考察
3. 学会等名 東京台湾文学研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 明田川聡士
2. 発表標題 遊走於歴史與文學之間 戦後臺灣人作家・李喬の太平洋戦争記憶
3. 学会等名 跨・界 第三屆戦後亞洲文學與文化傳播國際工作坊（國際学会）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 明田川聡士	4. 発行年 2022年
2. 出版社 関西学院大学出版会	5. 総ページ数 318
3. 書名 戦後台湾の文学と歴史・社会 客家人作家・李喬の挑戦と二十一世紀台湾文学	

1. 著者名 明田川聡士ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 國立臺灣文學館	5. 総ページ数 650
3. 書名 2019年臺灣文學年鑑	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>【翻訳（単訳）】 楊富閔（明田川聡士訳）「長い夜」『マテシス・ウニウエルサリス』23(2), p67-88, 2022年. 黄崇凱（明田川聡士訳）『冥王星より遠いところ』書肆侃侃房, 220p, 2021年.</p> <p>【その他】 明田川聡士「自著を語る 『戦後台湾の文学と歴史・社会』」『理』62, p2-3, 2022年.</p> <p>【その他（口頭報告）】 明田川聡士「自著を語る 成果と課題, 今後の方向性」東京台湾文学研究会, 2022年.</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------